

アスリートの語学力

江戸川大学教授・江戸川大学総合福祉専門学校長

広岡 勲



アスリートが世界で戦うためには、体力、技術力だけでは足りない。海外で生活基盤を整えるにも、コーチから技術指導を受けるにも、チームメイトと意思疎通を図るにも、語学力は欠かせない。いかに技術力が秀でていても、言葉が通じないストレスから力を発揮できずに終わる選手は多い。

では、いかに外国語を学んでいくか。一般の学生でも語学習得は難しい。ましてや日本のトップアスリートの場合、競技漬けの学生生活になることが多く、ますます困難とっていい。

その対策だろう。日本オリンピック委員会(JOC)のエリートアカデミーでは、語学教育プログラムも実施している。将来、オリンピックをはじめとする国際大会で活躍するジュニア選手の育成を実施する事業で、中学1年から高校3年生までの各種競技の選手を集めて指導している。ここでは技術練習やトレーニングのみならず、語学向上にも取り組んでいる。素晴らしい試みだと思う。

ただ、アスリートにとっての外国語は、決して「学問」ではない。コミュニケーションの手段である。習うより慣れろ。何冊もの参考書より、実際に外国語を使う環境が重要になる。

川崎宗則という野球選手をご存知だろうか。日本プロ野球のソフトバンク球団から大リーグに挑戦し、マリナーズ、ブルージェイズ、カブスでプレーした。今年からは再びソフトバンクに所属している。私は、彼を「世界を目指すアスリートの見本」だと思っている。

失礼ながら大リーグで大活躍したとは言えない。5年間での通算成績は150安打、1本塁打、51打点。打率2割3分7厘。もっと活躍した選手はたくさんいる。だが、コミュニケーション力では、歴代の日本人大リーガーの中で大きく抜きん出ている。

渡米した当初、川崎選手はまったく英語ができなかった。しかし、彼には臆するところがあった。片言の英語でチームメイトに話し掛け、通じないとボディランゲージを駆使して意思を伝えた。意味不明な英語、ピント外れの答えにチームメイトから爆笑される。それでも意に介さない。メモ帳を手に、覚えての単語を次々に口に続けた。いつの間にか川崎選手の「つたない英語」はチーム内で大人気になった。

ブルージェイズに所属していた2013年にサヨナラ安打を放ち、ヒーローインタビューを受けた際は、質問を無視してインタビュアーからマイクを奪い取った。「サンキュー・ベリー・マッチ! アイム・ムネノリ・カワサキ。アイム・フロム・ジャパン! アイム・ジャパニ〜〜ズ」と絶叫して、スタンドから拍手喝采を受けた。たったこれだけの英語でファンの心をつかんでしまった。

日本のテレビ局から日本語で質問され、英語で返答したこともあった。記者から「最後に日本語でひと言」と促されても「日本語はしゃべらない。ここはカナダだ。英語で答えさせてもらう」と答えた(もちろん英語で)。

私は彼を直接知らないが、このようなシーンを見るたびに「日本人らしくない大リーガーだな」と感じていた。多くの日本人は、英語ができないと気後れして黙ってしまう。また、勉強するとなれば、机に向かって文法から始めてしまいがちだ。だが、文法など学校教育の延長から入るタイプは失敗することが多いのではないか。外国語をコミュニケーションの手段と考えれば、「川崎流」の方がはるかに効果は大きいだろう。

私は現在、公益財団法人日本相撲協会の理事補佐も務めているが、横綱白鵬をはじめとした外国人力士たちの日本語力に驚かされる。日本人よりもきれいな言葉話すほどだ。ただ、特別な勉強をするわけではないという。来日して相撲部屋に入り、日本人の先輩と共に生活する。これだけである。日本語を覚えるしかない環境だからこそ、母国語のように駆使できるようになっていく。

通訳がつく場合、その関係にもひと工夫が必要だ。実績ある選手は好条件で移籍できるので、所属球団が通訳を用意してくれる。日本人大リーガーのほとんどは日本球界で実績を残してから移籍するため、このパターンに当てはまる。これは語学向上の観点からいえば非常に危険である。

もちろん契約などの重要な場面では信頼できる通訳が必要になる。インタビューの種類によっては誤解を招かぬよう慎重に言葉を選ぶ必要もある。イチロー選手らが通訳を置く理由はここにあるだろう。だが、日常生活のコミュニケーションでも通訳に頼りすぎては成長できない。チームメイトと信頼関係を築くことも難しくなってしまう。

大リーグ時代の松井秀喜選手にも通訳はいた。ただ、通訳を選ぶ際、松井選手とは「英語ができる日本人ではなく、日本語ができる外国人にしよう」と話していた。選手と通訳、日本人同士だと2人だけでの行動が多くなる恐れがある。これではチーム内で浮いた存在になってしまう。逆に通訳がチームメイトとコミュニケーションを取れば、選手も輪に入ってい

きやすい。松井選手が引退するまで通訳を務めたロヘリオ・カーロン氏はインド系アメリカ人だった。明るく社交的な性格でもあり、どのチームでも選手達と親しくなった。これが松井選手に好影響を及ぼしたことは間違いない。

また、私はよく松井選手に単独行動を勧めた。例えばヤンキースに所属していた大リーグ2年目。フロリダ州で行った春季キャンプでチャリティーイベントがあった。私は、イベントでは難しい話にはならないと判断し、独りで行ってもらった。松井選手は行く前こそ不安そうだったが、後で聞くと結構米国人ファンとの会話を楽しんだそうだ。

彼は今、ヤンキースのGM特別アドバイザーを務めている。通訳をつける立場ではなく、自ら努力し英語で若手選手を指導している。どんな言葉で指導すれば理解してもらえるか。ノートに英語やスペイン語をメモしてから球場へ向かっている。選手時代よりも、はるかに語学力が向上しているだろう。

外国語を使う環境と向上心。これに勝る参考書はない。

来年からは日本ハム大谷翔平投手が、大リーグに挑戦するといわれている。彼にも通訳がつくだろうが、チームメイトや地元ファンとのコミュニケーションはどうだろうか。投手と打者のみならず、日本語と英語の二刀流にも期待している。

広岡 勲

江戸川大学教授・江戸川大学総合福祉専門学校長

早稲田中学・高校卒業後、ハワイパシフィック大学卒業。ニューヨーク市立大学大学院修士課程修了。慶應義塾大学大学院博士課程中途退学。現在は千葉工業大学大学院博士課程に在籍。報知新聞社にて長嶋茂雄番など巨人担当記者を歴任し、2003年に松井秀喜氏の求めに応じてニューヨーク・ヤンキースへ入団。日本人初の球団広報に就任し、球団広報兼環太平洋担当としてのべ4球団、10年間に亘り大リーグに在籍し同氏を支えた。その後、WBC日本代表統括広報、日本相撲協会理事長付アドバイザーを経て現職。読売巨人軍事業アドバイザー、公益財団法人日本相撲協会理事補佐・危機管理担当も務める。著書は「道は自分で切りひらく」(岩波書店)など多数。